

平成28年12月、文部科学大臣への中央教育審議会答申によって、これからあるべき教育の姿が提示される。と、文部科学省はその実現のために、学習指導要領を作成した。学習指導要領は、小・中・高などの諸学校で教えなければならない最低限の内容を決めた基準である。よって学校で使用される教科書も、先生方の授業もこの学習指導要領に則つたものとなる。つまり、今の子供たちは、これらによって育成され、私たちが

これからの若者との向き合い方

活が大きく変化していくことを予測し、すでにさまざままな対応をされているに違いない。これからも成長し続けていくために、何に期待していらつしやるだろうか。超高齢社会に突入した以上、人手不足もさらに加速していくがゆえに、人工知能に重きを置いている方々も多かろう。しかし、忘れてはならない視点がある。いわゆる人工知能は、与えられた目的の中で行動していくだけの存在である。人間の存在を忘れてはならないのである。

今回、注目したいのは、新学習指導要領が全面的に担ぎ上げた主体的かつ対話的な深い学びである。もう、旧来の「先生の話を中心と座って、聞いておけー」という時代は終わりを告げる。教室での児童生徒たちは、先生が与えた課題に對して、自ら考え、クラスメートのみんなと解決を目指す議論していくようなスタイルで授業は進行する。旧式の教育しか受けたことのない世代には、驚きを禁じ得ないことになる。

若い頃の自分を思い出すとい。どのように社会や人生をより良いものにするかと、ワクワクしながら

新学習指導要領は、小学校から学年進行でスタートしているため、小中高が完全に揃い踏みするには時間がかかるが、嘘だと思つたら、5年後の教室を覗いてみるといい。教室では、子供たちの日本語や英語が飛び交っているに違いない。

未来の創り手は誰なのか

出迎える社会へ飛び込んでくるのである。

現代社会は変化が目まぐるしく、人間の予測を超えて加速度的に進展している。社会のリーダー的存在である皆さまは、社会や生



名古屋経済大学
法学部准教授

高橋 勝也

自問自答していた自分がいはずである。どのような未来を創っていくのかに希望を見出していたのではないか。その実現のために、劣悪だったかもしれない教育環境の中でも、歯を食いしばりながら学習し続けていったのである。

今までの、従業員が素直に受け入れた体制は、これからの若者には画一的すぎて窮屈かもしれない。トップダウンの指示だけでは、彼らの思考・判断力を殺しかねない。多様な視点に気づいて、課題解決のための選択や判断する彼らの力は、着実に伸びていく。

人間の根幹は変化することはない。モノが溢れてハングリーさが失われているかもしれないが、今の若者たちもどのような未来を創っていくかと、チャレンジングに活動している。

法・公民科教育法。専門教育大学
修士課程修了。1969年生まれ。

